

## 表紙の解説 森鷗外と北里柴三郎，河本重次郎—学問的対立と学閥，そして友情について—

谷原秀信



図 1888年6月3日，ドイツにて(文京区所蔵)  
前列左端が河本重次郎，中列左端が森鷗外，中列右から二人目が北里柴三郎

### はじめに

今回より，表紙シリーズとして，「一葉の写真」と題して，眼科医にとって興味深い写真をとりあげ，その解説を記事として掲載していきたいと思います。

その第一回として，今号の表紙に引用したのは，明治21年(1888年)6月3日，当時の陸軍省医務局次長であった石黒忠恵が欧州視察した際に，当時ドイツ留学していた者を集めて撮影された記念写真です。最近，山崎光夫が執筆した「明治二十一年六月三日」(講談社刊)でクローズアップされた写真なのですが，ここに森林太郎(鷗外)，北里柴三郎とともに，東京大学初代眼科教授となる河本重次郎の若き日の姿を見ることができます。そこで，近代眼科の創設期を構築した眼科医河本重次郎と日本文学史・医学史に令名を馳せる巨星とも言える森鷗外，北里柴三郎の交友を解説したいと思います。

### 森鷗外の生涯

森鷗外は，島根県津和野町の出身で，東京帝国大学医学部を卒業後，ドイツ陸軍の衛生制度を調査するために，陸軍省派遣留学生としてドイツに滞在しており，この前後の出来事が帰国後，「舞姫」の素材となっています。訳詩集「於母影」，翻訳「即興詩人」，「キタ・セクスアリス」，さらに歴史小説「阿部一族」(熊本藩細川家中であった実際の騒動に基づいています)など多彩な文学活動を通じて一時代を築いた文学者です。その一方で，軍医としては，赫赫たる経歴を駆け上がっており，軍医総監，そして陸軍軍医の人事権を掌握するトップの陸軍省医務局長を長年務めました。ちなみにこの頃，東京大学第二代眼科教授となった石原忍は，元来軍医であったのが，東京大学に招聘されて眼科教授となります。森鷗外は，軍医のトップですから，二人の間には，上司と部下の関係が

ありました、実際、石原 忍が陸軍の命令によりドイツ留学する際(大正元年)には、陸軍省医務局長として森 鷗外が、見送りにきたという記録が残っています。石原 忍自身の言葉を引用すると、「森局長は、私が渡欧するとき、わざわざ東京駅まで見送りに来られ、私の長女が、妻の背に負われているのを見て、そばへ寄って長女の手をとつて、あやして下さつた。稀世の文豪に握手をしてもらつた長女は、幸せであつた」(石原 忍「回顧八十年」東京医事新誌)。森 鷗外は、その後、皇室博物館総長兼図書頭、皇室制度審議会御用掛、帝国美術院初代院長を歴任し、大正 11 年(1922 年)に逝去しました。

### 脚気論争における確執

文学者としての名声に比して、軍医としてしばしば批判的に言及されるのは、二十万人以上の脚気罹患者と、それによる三万人ともいわれる死亡者を陸軍兵に出してしまった最高責任者のひとりであった事実です(海軍では、将兵に支給する食事内容が異なつたために、脚気による犠牲者がほとんど出ませんでした)。当時医学界の中心人物であった東京帝国大学内科教授青山胤通(後日、東京帝国大学医科大学校長)、衛生学の緒方正規などは脚気感染症説をとっており、青山と親友であった森 鷗外を含めて、これが当時の医学界の趨勢となつておりました。そのため、陸軍では食事内容の変更を認められず、これが原因で膨大な犠牲者を生じたのです。脚気論争においてもそうであつたのですが、森 鷗外や青山胤通は、医学界の最高権威として世の趨勢を決定する立場にあり、在野の研究者ともいえる北里柴三郎を排斥する態度を取つたことで、その確執について、後生非難されることになりました。自らが正しいと信じた学説が誤つていたからといって、森 鷗外や青山胤通を過剰に批判することは、個人的には、いかにも表層的な結果論に与するようで好ましいとは思えないのですが、あまりにも影響力が強くなりすぎた体制側の権威者が、学問の自然な進歩

を抑制して大きな弊害をもたらしてしまうひとつの事例とは言えましょう。

### 北里柴三郎と東京大学派の対立

北里柴三郎は、熊本県小国郷の出身ですが、熊本医学校(現在の熊本大学医学部)を経て、東京大学に入学します。同じような熊本医学校の同輩で東京大学医学部に進んだ仲間のひとりに、後日、東京大学初代衛生学教授となつた緒方正規がいます。北里柴三郎は、森 鷗外の二年後輩、青山胤通の一年後輩にあたります。もっとも当時、医学校(後の東京大学医学部)予科の入学には、年齢制限があつて、若すぎた森 鷗外は年齢を水増しし、北里柴三郎は逆に年齢を四歳誤魔化して入学したので、二年後輩であるはずの北里は、森 鷗外よりも実際は十歳年長でした。ドイツで当時の細菌学の最高峰であつたコッホの下で破傷風菌やジフテリアについて世界的な業績を挙げました。森 鷗外も、北里の紹介でコッホと面談し、その指導を仰ぎました。

森 鷗外の「独逸日記」における明治 19 年の記述に、「三浦、榊、加藤、河本、隈川、青山、北里、田中等を雅典食店に招きて饗応す」という記事があります。この「北里」が北里柴三郎、「青山」が青山胤通、「河本」が河本重次郎のことです。彼らは若き同時期にドイツに暮らし、度々、飲食をともにし、交友していたのです。しかし北里柴三郎は、帰国後、若き頃からの友人であつた森 鷗外や青山、緒方との苦しい対立に晒され、出身校である東京大学から排斥されました。その大きなきっかけが脚気を巡る論争であり、当時の世相を炙り出す興味深い様相を呈します。

そもそも北里柴三郎は、熊本医学校の同輩で、同じく東京大学医学部を卒業した緒方正規の指導を仰ぐ形で細菌学を始めました。つまり当時の感性では、学問上の師弟関係になつたと理解されたわけです。ところが、緒方が脚気について脚気細菌説を明治 18 年の時点で発表していたのにもかかわらず、北里は、彼の追試実験の

結果に従って、学術雑誌で反駁し、脚気菌説を明確に否定しました。これに対して当時の東京大学派は、「師弟の道を解せざる者」（東京大学総長 加藤弘之の言ですが、この加藤弘之は上記の鷗外主催の食事会に同席していた「加藤（照磨）」の父親でもあります）と激しく非難しました。森 鷗外も東京大学派の立場から、北里を「識ヲ重ンセントスル余リニ果テハ情ヲ忘レシノミ」と酷評し、これに対して北里は、誌上にて、「生は情を忘れたるものに非ず。私情を制したるものなり」と反論したことで両者の対立は、広く医学界に周知されることとなります。コッホの深い信頼と世界的な名声を得たにもかかわらず、北里柴三郎は、帰国後に東京大学に研究の場を得ることが叶わず、福沢諭吉の支援を受けて、伝染病研究所（現在の東京大学医学研究所）を設立し、その後、この研究所は内務省所管に組み込まれました。ところが、所長であった北里柴三郎の与り知らぬところで、突然、伝染病研究所は文部省所管となり、対立していた東京大学派の頂点にいた青山胤通が所長を兼任することになりました。この「事件」によって、北里は急遽辞職し、北里研究所（現在の北里大学の母体となります）の設立に追いやられます。その後、福沢諭吉の恩義に報いるべく、慶應義塾大学医学科（後に医学部）の創設に至り、初代医学部長を務めました。北里柴三郎は、「肥後のドンネル（雷）」と呼ばれるほどの激しい気性であったといわれます。

#### 北里柴三郎と眼科医、河本重次郎の交流

さて、北里柴三郎は、後日、東京大学で初代眼科教授となる河本重次郎の友人でもありました。河本重次郎は、兵庫県豊岡の出身です。河本重次郎の「回顧録」には、興味深い青春の一頁が記載されています。河本重次郎は、北里柴三郎と東京大学の同期でした。河本重次郎「回顧録」から彼の北里評を引用します。「急に何にか相談会でもであると、北里柴三郎君が議長と云う風で、今日、同君が有名となりし一つは、

此議事的、事務的才を持たれたからであると思ふ、其時分「不肖柴三郎」と云ふ様な語調で、議されたものであった。兎に角、同君は吾々よりも四五歳上で、先ず先輩の格であった。併し、能く出来たと云ふのではない、学校の成績は中等位であった（「回顧録」p.75）。ちなみに東京大学では、首席が河本重次郎で、北里柴三郎は八位だったそうです。河本重次郎の「回顧録」には、もうひとつ興味深い記載があって、「或る時、青山君がスクリバに何にか問われて、答えが旨く行かなんだ、所が上の方で見て居た余が級の北里君が、何の気もなく少しく笑った、青山君は大に怒って、手に持って居た大腿骨の頑頭で、振り向き乍ら、北里君の頭を打たんとしたことがあった（p.79-80）」。

明治期のパンカラ（ハイカラに対するアンチテーゼとして、あえて振る舞う粗野や野蛮な言動を意味する言葉として明治期に造語されました）な学生達の青春の一頁として、ほのぼのとした牧歌的な喧嘩の一幕なのですが、後年に青山と北里が、組織や権力を介在させての殺伐とした対立を繰り広げることを想起すれば、その懸絶に一抹の寂しさを感じます。また北里柴三郎の「憚ルサモナクオノガ意見ヲ述ベシ（森 鷗外による「東京医事新誌」での北里に対する記載）」と非難される気性と、青山胤通の「人に愛せらるゝと云ふよりは、寧ろ敬畏せられたる（河本重次郎「回顧録」p.80）」人柄については、若き頃のこの一幕における言動と後日のそれぞれの人生の間で、奇妙にも平仄が合っているような気がします。

#### 眼科界の巨星、河本重次郎

優秀な医学部学生であった河本重次郎は、当時東京大学で医学を指導していたスクリバに可愛がられて、医学部雇いにて、スクリバの助手を務めました。当初、外科を志していたのですが、ドイツ留学から帰国した梅 錦之丞（医学部講師）が最初の眼科教授となるべく期待されていたにもかかわらず、彼が急逝したことで、急

遽、初代眼科教授となるべくドイツ留学を命じられました。ちなみに河本重次郎は、加藤正矩の養女である香芽子を娶るのですが、正矩は前述の東京大学総長となる加藤弘之(男爵)の実弟にあたります。すなわち、河本重次郎は、東京大学を首席卒業し、教師から高く遇される秀才であったうえに、ドイツ留学時代の友人であり、表紙の写真にも写っている加藤照磨と姻戚関係となり、巨大な東京大学閥の濃厚な人間関係の中で中枢に近い位置にすることが理解できます。留学時代の森 鷗外とは交流が続き、「独逸日記」には、「河本来る。伴ひて酒店シユニヨルに至る」との記載がみられます。帰国後の両者の交流は限定的ですが、「日本近代眼科学の父」とも賞される河本重次郎の活躍については、「日本眼科学会百周年記念誌」「東京大学医学部眼科学教室百年史」などに詳細な記載がなされており、ここでは深くは言及しません。

その門下は全国に広がり、九百余名を数えると言われています。例として、私が奉職している熊本大学の先達に言及すれば、河本重次郎「回顧録」に「大正元年の夏期には、鹿児島に講習に行けり、其節、鹿児島茂君が随従さる(p.163)」とあるのは、後日、河本門下の高弟であるとともに、熊本大学第四代眼科教授となる鹿児島 茂であり、「島原の町では、中島写真館に一泊せり、中島氏は、鹿児島注連吉氏の兄なりと云うを以つて、島原温泉も同氏の案内を受けたり(p.164)」とあるのは熊本大学第三代眼科教授(その後、金沢医科大学、名古屋大学、東京大学教授を歴任)である中島 實の実家で、彼もまた河本門下となります。さらに、「島原より三池に渡り、それより熊本に行き、豊田、行徳君、又校長の谷口君等より、ある所に招待を受けた(同頁)」とあるのは、熊本大学初代眼科教授豊田虎之進と講師行徳建男であり、両者はともに河本門下です。ちなみに、第二代眼科教授である瀬戸 糾も河本門下のひとりです。

このように当時の全国医学校の眼科教授や県立病院眼科医長は、ことごとくと評して良いほど、河本重次郎に師事し、東京大学か廻りにあった河本の自宅診療所(河本病院)で研修した後に、全国に散っていきました。行徳家は、享保年間から現在に至るまで綿々と眼科を継承する肥後地域の名門であり、上記の鹿児島家も代々眼科を継承する名家でした。

### おわりに

青雲の志を抱いて、同じ学舎で学んだ友人同士が、社会に出て、組織に属することで、異なる立場となり軋轢を生じるというのは、残念なことではありますが、しばしば遭遇する出来事です。明治期の日本は、立身出世を是とし、国家に貢献することが人生の本懐と疑問なく国民が思えた高揚とした興隆期にありました。その過程で、激しい対立があったことは避けることのできない必至の事象なのかもしれません。ただしサイエンスの世界は、時代による淘汰によって、常に学問的に正しい真理に遅かれ早かれ至ることを明確に示します。権勢や政治的画策でこれを覆すことは至難の業であり、自説に固執しすぎて、他を感情的に非難することについては謙虚であるべきことが理解できます。また、学問上の対立が私的な愛憎に直結するとも限りません。上記の北里柴三郎と緒方正規は、学問的対立を繰り返したといわれますが、激しい気性の柴三郎に対して、緒方は穏健な人柄であったとも伝えられており、両者の私生活における交流は終生続き、緒方の葬儀では、北里柴三郎が弔辞を読んでいます。個人としての品性や器量は、学問的立場で制限されるものではないのでしょうか。表紙に掲載した一葉の写真が象徴的に示すものは、公私にわたる濃厚な人間関係で構成される学閥と論争、そして友情のあり方について、いろいろと考えさせてくれます。〔谷原秀信：熊本大学大学院眼科学分野〕